

卷之七

水彩畫法

龍畫

幼き兒等や、知らぬ人々の、水彩畫といふもの習ふ手引はとて思ひ出づるまゝを書き連ねたる此の小冊子。

水彩畫手引

穂帖 著

水彩畫の繪具

日本畫の繪具を水彩畫の繪具に代用することはい出来ぬでもないけれど、無理である。やはり水彩畫の繪具として出来て居るものが多い。

○舶來の繪具でなければならぬと思つて居る人もあるが、近頃は和製にも段々よい品が出来るやうになつて居るから、夫れで結構かゝるのである。

○和製の繪具では、東京の村田、京都の村田など随分舶來品にもつゝあるが、花の家具など、何れも使はれる。上繪具は余り花など、色合の物は宜しくない。

959

水彩畫手引

蟬 著

水彩畫の繪具

日本畫の繪具を水彩畫の繪具に代用することには出來ぬでもないけれど、無理である。やはり水彩畫の繪具として出來て居るものがよい。



- 舶來の繪具でなければならぬと思ふて居る人もあるが、近頃は和製にも段々よい品が出來るやうになつて居るから、夫れで結構かけるのである。
- 和製の繪具では、東京の村田製、中村製など随分舶來品にも劣らぬのがある。
- 花の家製なども可なり便はれる。
- しかし繪具は余り花々しい色合の物は宜しくない。

○繪具は色の種々澤山にあるものを選び、必要はないので、此本の終りに在る通り大低八色ばかりあれば先づ不足はない。

○繪具は堅い墨の様に出来たものより、練たものが使ひよい。

○繪具は木箱入より、金屬の箱入が便利だ、其函の蓋が繪具皿になつて居るから。又野山へ實寫よ出た時などは其繪

具函の裏よある鑲へ左の手の拇指をはめて持つのである。

繪具の扱ひ方

○繪具を溶かす時には、一々よく筆を洗つて、種々な色の繪具の上へ混じらぬやうにせなければならぬ、面倒でも○思ふ色になるまで、二色又は三色を繪具皿の上で十分よ混ぜ合はせてから畫

に塗るのだ、決してうるたぬるものではない。溶いた時の色は、手本の色よりも少し濃ゆい位にして置くことも大事である。色は大低かはくと淡くなるものだから。

○繪具皿で十分に色を混ぜて置かないと干いてから紙の上よ粉が浮いて、合せた色が別々よあつて居るやうな事が出来る。

○色を混ぜるには、淡い色を先に溶かして、黒みのある色や濃ゆい色を後に入れる。

○繪具皿を洗ふのが面倒だからと言ふて、先について居る種々な色を失鱈に混ぜ合せて畫に塗るのは頗る悪い。○兎角燕性は畫の大禁物だ。

○一枚の繪を書いた後では必ず繪具皿を拭いて、繪具の上にある水氣は十分に

取て置かねばならぬ。

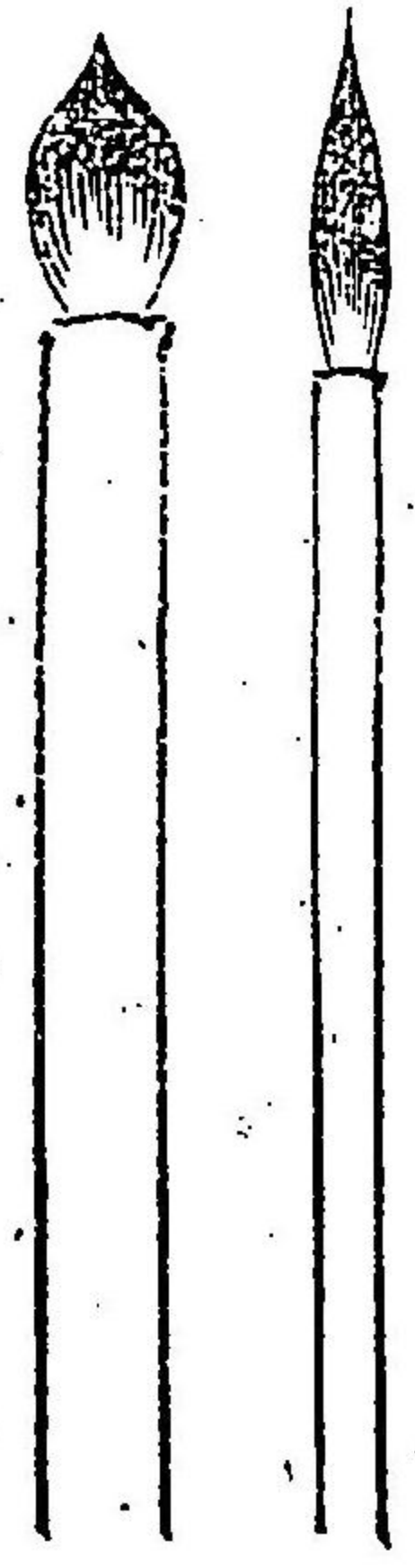
○繪具の水氣がなくなつて、墨のやうに堅くあつて龜裂われるやうな事がある

○こんな時は「リスリン」をつけて置くか、うすい「アラビヤゴム」などを塗て置くもよし。

水彩畫の筆

○水彩畫の筆は毛の柔かきものがよい。

○毛さきの形は大概この圖のやうな形のもの十分水を含んで宜しい。



○筆は大小二本あれば先づ足りる、余程大きな畫を書く場合には別に大筆とか刷毛とか入用な譯であるが。

○通常繪具函に附いて居る筆は余り感心せぬけれど、別よ水彩畫筆に出來て居る物を買へばよいに違ひはない。

○日本畫筆のやうな毛先の強いびんくしたものは善くない日本畫のかすれたやうな筆使ひは西洋畫嫌ふのだから

○色の變り目は言ふまでもなく、畫を書いて仕舞ふた時にも筆は必ず十分に洗ふて置かねばならぬ。

繪具皿

○馬鹿に繪具皿を澤山ならべるのは、詰らぬ話で、毎度拭ひさへすれば二三枚で十分である。ことに繪具函に繪具皿の取り附けてあるものは夫れでも結構だ。

○繪具皿には種々あるものがあるが、何れでもよし。

筆洗

○小さいのよりは大きいのが宜しい。
○實寫の時などは別に出来て居るものが有るけれども、曇る徳利の類でも事は足りる。

ゴム

○「ゴム」は極く軟かもので小しも紙を損じないものでなければならぬ。堅い「

ゴム」を使つた上へ色を塗ると其所だけ色がちがふ。

鉛筆

○輪畫用の鉛筆は極うすい墨のもの。

紙

○水畫具に用ゐる紙は、堅くて其の面のざら／＼して居るものがよい、質の余

り柔かいものは色が思ふやうに延びない。面の余りすべつこい物は色が着かぬ。

○「ワットマン」と言ふ紙などは水彩畫に適當な紙であるけれども、値が非常に高くて初學のものには勿体ないから、通常畫用紙の少し上等なものを買へばよからう。

○水引きの早い紙は悪い。

○用器畫に用ゐる艶のある洋紙などは頗るよくない。

水彩畫法

○手本を見て書くのでも、實物を寫すのでも、輪畫を取ることは鉛筆畫とかはりはないので、これで正しい形を定めるのである。輪畫が取れたら成るべく其線を淡くして、入らぬ線は奇麗に消

して置かなければならぬ、色を着けて消すことは出来ぬのだから。

○この輪畫を取る間に成るべく紙の表へ手の油のつかないやうに氣をつけぬと色を着ける時に油ではぢいて難義をする事が毎々ある。

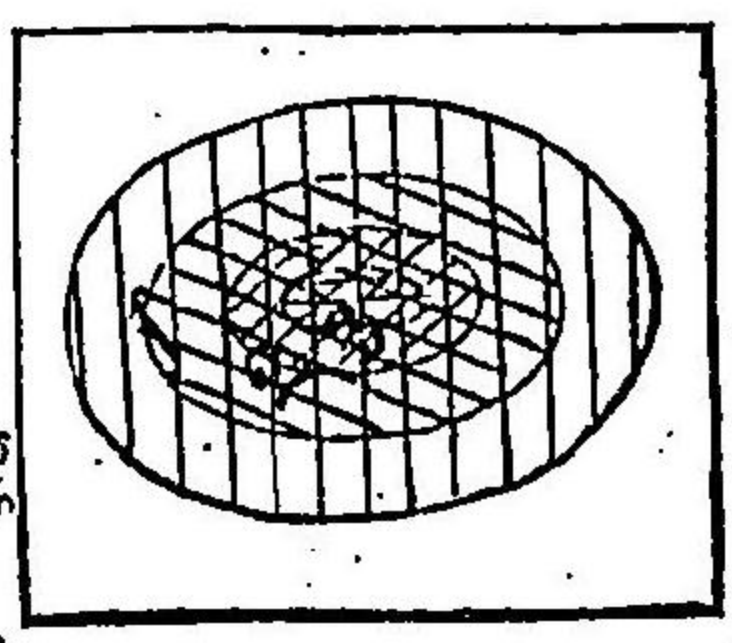
○さて是から色を塗ることよなるのだ、すべて水彩畫は片側から色をこつくと塗り上げて仕舞ふものでは無い、最

初全体に淡い色を塗つて置いて、夫れから次第に濃ゆい色を着けて、最深い色で仕揚げるのが順序である。

○初から薄い所を淡く、濃ゆい所は濃ゆく塗るものだと思つて居るのは大間違ひ。

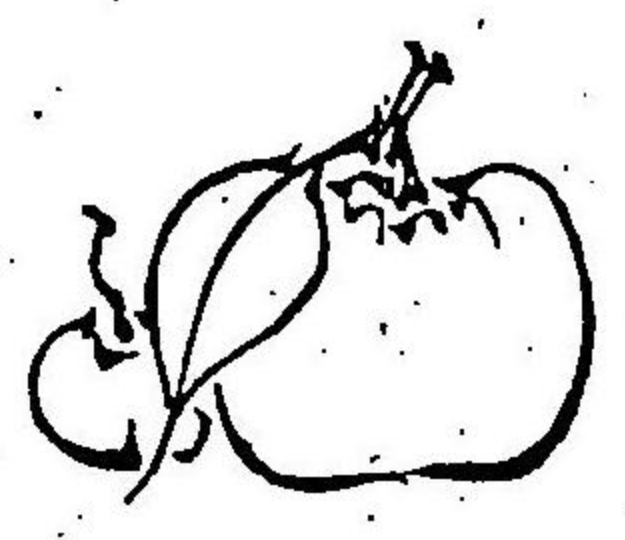
○同じ色の淡いものでも、塗つた上へ段々に塗り重ねて行けば、次第く濃くなつて行くものである。それだから

水彩畫の始めに、一色で濃い淡いを塗り分ける練習をすることがある。例へば圖のやうな球に色着



けをするとして初め全体に色をつける、夫が干いてから、1の線のうちらへ同じ色をつける、次よりの線のうちらへ、次に3の線のうちらへ同ト色を着けると、次第く濃くなつて

、日の表と陰の所どが善く分かる。○種々色をつかつて書く時も同じ道理で、圖のやうな果物に着色するとすれば、初め橙全体に淡



き黄色を塗り、葉に淡き綠色を塗り、林檎は淡き黄綠色を着けて置いて、夫れから橙には橙の陰、葉には葉の陰、林檎には林檎の陰とだんく

に種々な色で塗り重ねるのである。

○色の合せ方は別に書いてあるから夫れに合せて見れば大低は分かる。

○凡て水彩畫は余り濃い色を初から塗るものではなくて、淡い色を幾度にも塗り重ねて濃くすると思ふのが第一だ。

○色を着けたら其色が十分に乾くまで待て、其上へ又色を塗るので、余り急いで乾き切らぬうちに次の色をかけるの

は頗悪るい。

○先づ水彩畫の手順をひつくるめて言へば、

一、全体の色を塗り定めて、たひおひに細かい所を塗り出す。

二、淡い色から追々に濃い色にする

三、日當りから追々に陰の所をかく

○日本畫のやうに、色筆のはかに別に水筆を持って居て、色を着けては其色の端

を水筆でボカスといふ事は決してせぬ

○いくら筆のあとが見へてもかまはぬ

○すべて西洋畫は離して見るもので、

遠くはあせば筆のあとも色の界も自然

にボカサレて見ゆるのである。例は圓

いものでも、人の顔のやうなものでも

○又水彩畫の色は大低二色か三色か混つ

たものを塗ることが多いので、一色を

其まゝ塗ると云ふことは極少あり。

○水彩畫の手本を見る時は初から濃ゆい

所を見るものではない、一番うすい所

を見て、其色がどんな色であるかを見

分けられた後は、其色が何處から何處まで

塗つてあるかを考へ、其通り自分の畫

に塗る。次は先の淡き色の上に何の色

が塗てあるかと考へるのである。たゞ

見ると紫のやうにあるが赤の上に塗

てあるものとすれば、これは紫が塗

てあるのでは無く、青が塗てあるの
 赤の上に青があつて紫に見ゆるの
 だ、それに手本が紫に見ゆるからと
 云ふて其通りの色を赤の上へ塗たら、
 どうしても手本とは違ふ色よある道理
 だ。これが水彩畫の手本を見る大事な
 所で、色の加減は茲にあるのだ。
 ○それだから水彩畫は、この下色の上へ
 此の色を塗つて、夫れが乾いたら手本

の此色にあると言ふ事を考へるのが第
 一だ。
 ○總じて色は濡れて居る間は濃く見えて
 も、干けば幾分か淡くなるから其積り
 もあつてはあらぬ。
 色のをしえ
 ○これから色に就いて教へやう、本の終
 につけてある色の表を廣げて見なさい

○上の段に八種の原名が書いてあるが、
 右の下りよある(1)から(8)までは其
 色と同じである。
 ○此の色の表は八種の色が寄つて出来る
 合色を示したので、二色づゝ合せてさ
 へ表の通り四十四種の色が出来る、な
 は三色も四色も合せて行けば何程の色
 でも出来る。
 ○手本を見て繪を書く時には、其色が此

表の中の何番の色に似て居るかと言ふ
 ことを見比らべて、それを混ぜ合す時
 に、少し片方を多くするとか少なくなす
 るとか、又は其上に別の色を考へて少
 し合すとか工夫すれば直ぐ分かる。
 ○畫は手本を寫すばかりが大事ではな
 い、種々な實物やら、又は色の無い圖を
 寫して、夫れに色を着けることが面白
 くて、必ずやらなければならぬ事であ

る、其時に此んな物よは此んな色を塗
ると言ふ事がむつかしい、いくら實物
を見ても其通りの色は繪具に無いとい
ふやうな苦勞がある。

○しかし繪の色は成るべく實物よ近かよ
らせるると心得て居らなければならん
ではあるが、實際實物よは様々の陰や
日當りがあつて、ほんどの色を見定め
る事は中々困難なものである。そこで

大概定まつた色の具合を覺へて置く
大層便利よ違ひない。故に色の表の番
號に従ふて分り易い入用な事を御話せ
う。

色の表よ就て

(1) 淡緑、こればかりで使用する事は少
ないが、先づ左のものに塗るにはよか
らう。

一草樹の極若いもの

一それに日の當つて居る所

(9) 淡緑を二度塗ると濃くなる。用所は

前のものと同じだ。

(10) 緑と藍の混じつたもの、

一草樹の葉に 最廣く用ゐるもの。

一藍を多くすれば陰の所へ使ふ。

一(10)の色に少し(5)の色を混ぜる

と一層善い樹の葉の色が出る。

一(5)の色を多くするはと枯葉に近
くなる。

(11) 緑と青と混じつたもの、

一草樹の葉の陰の所。

一常盤木の葉の類。

一山の遠い所。

一青を多くするほど遠い所。

一鳥の毛の黒くて青く光るやうな所

一深い水の色。

一海の沖など。

(12) 緑とセピア、

一緑を少くして、生木の幹。

一(12)に(8)を混ぜて枯葉など。

(13) 緑と岱赭、

一(12)と同じく樹なれば幹か枯葉。

一山土に苔のある所。

(14) 緑と洋紅、

一紅葉の青みある葉。

一バラなどの葉の筋や、刺。

(15) 緑と朱。あまり用ゐぬが、

一紅葉など。

(16) 緑と黄、

一若葉類、柔かさ植物類。

一柑類、芽の類。

(2) プラシヤン、ブリュー、藍、

一水の色、薄くもし濃くもし。

一空の淡色。

一白きもの、陰。

(17) 藍を二度塗つて濃くなつたもの。

一大低(2)と同じ。

(18) 藍と青、

一空か水。

(19) 藍とセピア、

一屋根の類。

一水のかげ。

一生木のかげ。

一土地の色。

一岩石の類。

(20) 藍と岱赭、

一大低(19)と同じ。

(21) 藍と洋紅、紺よなる、

一明方の空の雲など。

一赤き物の影。

一花など。

(12) 藍と朱、あまり用ゐぬ。

(23) 藍と黄、(1)や(9)と同色。

(2) 青、物の陰影には總て此色が混る。

一空の色。

(24) 青を二度重ねて濃くあつたもの。

(25) 青とセピア、

一諸物の陰影に最廣く使ふもの。

一岩石類。瓦屋根の類。

(26) 青と岱赭、

一土の陰、其他前と同じ。

(27) 青と洋紅、紫にある。

一曉の空など。

一其色の花や模様。

一物に陰につかふ事もある。

一遠山につかふ事もある。

一日の映る夕暮の水など。

(28) 青と朱、あまり用ゐぬ。

(29) 青と黄、緑になる。

一(16)(11)など、同じ。

一樹木の幹、枯木、枯葉。

(4) セピア、黒褐色、

一物の陰。

一樹木の幹、枯木、枯葉。

一土壌の類。杉屋根類。

一獸類の色。

(30) セピアを二度重ねて濃くなつたもの

一前と同じ。

(31) セピアと岱赭、

一板類に日の當りたる所。

一其他(4)と同じ。

(32) セピアと洋紅、

一赤きもの陰。

一紅葉などの陰。

(33) セピアと朱、あまり用ゐぬ。

(34) セピアと黄、

一黄なもの、陰。

一柑類、枯葉。

一藁の類、枯竹の類。

(5) 岱赭、

一淡くすれば肉色。

一砂地、元山。

一木具の日當り。

(35) 岱赭を二度重ねて濃くしたるもの、

一(5)と同じ、

(36) 岱赭と洋紅、

一赤の濃きもの。

一其他大畧(32)と同じ。

(37) 赭岱と朱。

(38) 岱赭と黄、棹色になる。

一(37)も(38)も柿の色などに用う。

一藁類も用う。

一枯木、枯竹、枯葉の類。

一柑類のやうな果實の熟した所。

(9) 洋紅。

一赤きもの。

一紅葉の類。

一熟したる果實。

(39) 洋紅の二度重なつたもの、

(40) 洋紅と朱、

一(39)も(40)も赤の濃きもの。

(41) 洋紅と黄、棹になる。

一(38)の濃き所に用う。

(7) 朱、下等の繪具にある朱は、繪の具

函よある時朱のやうに見ても塗り

上げるど紅になるものがある、

一夕焼の空、明方の出の空。

一燈火の色、

一燈火には(41)の淡いのや、(42)な

ども用う。

一炭火の類。

一すべて焼くるもの。

(42) 朱の重きつたもの、

(43) 朱と黄、樺色の類。

一(41)に同じ。

(8) 黄、黄といふても之は橙黄である、

黄には多く之を用うるので、別にあ
る雌黄などは余り黄が強いから用ゐ
ぬのがよい。

(44) は黄を重ねて濃くしたものの、

一柑類のやうな果實。

一黄の光るもの。

一淡くして月の色。

○以上は只た手近い二つ三つの例を示し
た迄であるから、これで何も彼も十分
だと思つては大變だ。

又これに書いてある色でも其通りであ
ければならぬと言ふ譯は無いので、段
々工夫をして、一層善い色合を考へる

のが第一である。

○衣物や其他飾り物の色などは限りが無
いから書いてはない、茲に書いてある
のは自然の物や、重よ風景に就てい
る。

○此他にホワイト(白)と言ふ繪の具があ
るが、

一(10)(11)などに混せて遠山又は遠
林を書く、

一もの、非常に光つた所を書きぬく
一白き模様、
などに用ゐる。

○重ねて言ふが、色は決して表にあるや
うよ二色ばかりを合すものと限つた譯
ではなくて、三色も四色も合はす場合
が多いのだから、夫は銘々に善く工夫
をしなければならぬ。

○又同じく二色とか三色とかを合すにし

ても、混せる色の分量によりて種々に
變るものだと言ふ事も兼て心得て置か
ねばならぬ。

水彩畫の書きぶり

○たゞ何うでもよい塗りさへすれば水彩
畫になるものだと思つて居る人がある
けれど、夫は甚だ不心得なことで、や
り筆が軽く上手に使はれて居なければ

ばならぬ事は無論である、また筆が軽
く上手に使はれねば美しい色が出ない
、同じ色を塗るにも、上手な筆で着け
るのと、下手な筆でこそげるのとは大
變な相違で、殊に色を塗れ上へ別の色
を塗る時などは、なほさら上手に軽く
塗る必要がある、下手にこそげると仕
舞には下色までがメチャ／＼成つて
来る。

○極大きな所を塗るには刷毛などを使用
するが、それは別として、小さい筆に
少しづつ、繪具をつけて、ちび／＼と塗
着けて行くのは頗るよくない、塗て居
る内に初の方が乾いて来る、後の方ど
色が違つて見ゆる、又色筆を後戻りさ
せて乾きかけて居る上を擦る、すると
滲みのやうな班が出来る、それを消さ
うとして愈々塗り重ねる、段々色がへ

んでこに變つて思ふた様にならぬ、ま
す／＼あせると、ますます悪る／＼成る
と云ふ様な事は毎々あるのだ、夫故に
○色を塗るには太い位の筆へ、たゞふり
と色を含ませて、紙の上に溜るほどに
塗り流す方が善いのである。
○此様にして下色を着けた上へ、又色を
着ける時も同じである。
○水彩畫には「ボカス」と言ふ事はせぬ、

ポカスと言ふのは、色筆のほか一本の水筆を持って居て、色を着けては其色の端の所を水筆で撫でると、色がたんとくに淡くあつて、色の境目が目立たぬ様になる事を言ふのだが、水彩畫では其筆の跡が見えて居るのが面白いとする位である、それだから又自然筆づかひにも注意しなければならぬ譯なのだこれは前にも言ふたのであるが順序

だから重ねて言ふのである。
○色筆が紙の上を通のるは成るべく數の少いのがよいので、數の少ないほど色が冴ゆる。
○しろし乾いた上へ段々に色を重ねて行くのは、なるだけ差いの少ない色を幾度も塗り重ねて、畫を仕上げるのが綿密で立派だ、上手な人は僅かな色で面白う畫を作るけれど、手数は入らぬや

うでも夫は却てむつかしい。
○筆はどうしても軽く早くしければならぬ、早いと言ふても、むちやくちやゝ走り書きをすると言ふのではない。
○筆は眞直に立て、書くのだ、どんち廣い所を塗る時でも。
○腕を浮かせて書くやうな習はねばならぬ。
○色をかすらせるのは悪い。

塗りそこなつては取りかへしが出来ぬから筆を下すまでに能く調べて見いと飛んでもない色を塗り着けて泣きたくなる事がある。
○色が濃くなれば濃くなるほど、塗る部分も少なくなつて、目に立つ事も強くなるのだから、ますます注意を細にして、一線一點でも入らぬ所へ着ないやうしなければならぬ筆を矢たらゝ早

く動かす其勢よつれて、思はず知らず妙な所へ線や点をかく事がある、それがために折角の繪がつぶれて仕舞ふ事が毎々あるのだから恐ろしいではないか。

○線を引いたり塗つたりする筆の初や仕舞に、日本畫のやうに撥ねるやうな癖のつくのは悪い、筆の初も終りも、只なんともちくじつと留めて置くのが

よい。
○一色を塗る間に、なん度も色が足りなくなつて急ぎ足す様な事のないやうに、これだけの所へ塗るには大低とれ位色が入るかど能く考へて夫れ相應にこしらへて置かなければならぬさもかくば急にこしらへると自然前の色と後の色とが差ふやうになるから。

練習

○水彩畫の練習として、前よ書いた鉛筆畫へ色々工夫して色を着けて見るもよい、鉛筆畫には既に陰影がついて居るから、ことさらに色で陰影をつけるに及ばぬ。

○又前にも言ふた通り、藍とか、セピアとか、一種類の色で一ツの畫の濃淡を

書き分けて見ると面白い、丁度色寫眞のやうな物が出来る。
○實物を寫す方法は別よ「實寫要録」と言ふ書物の内へ書く事にした。

(完)

明治三十六年一月十六日印刷
 明治三十六年一月十九日發行

編輯者兼
 發行者

櫻俱樂部編輯所

右代表者

大阪市西區立賣堀南通四丁目
 淺井吉太郎

印刷者

大阪市北區老松町二丁目
 岡本藤五郎

發行所

大阪市西區立賣堀南通四丁目
 淺井龍章堂

賣捌所各府縣書肆

複製
 不許

(色の表) 水彩画手引與附

レモン、青	ライオン、青	クリスタル、青	ライト、青	セピア	フランシス、青	エメラルド、青	
16		14	13	12	10	9	1
23		21	20	19	17	10	2
34		32	31	30	19	12	4
38		36	35	31	20	13	5
41		39	36	32	21	14	6
43		40	37	33			7
44		41	38	34	23	16	8

明治三十六年一月十六日印刷
 明治三十六年一月十九日發行

編輯者兼
 發行者

櫻俱樂部編輯所

右代表者

大阪市西區立賣堀南通四丁目
 淺井吉太郎

印刷者

大阪市北區老松町二丁目
 岡本藤五郎

發行所

大阪市西區立賣堀南通四丁目
 淺井龍章堂

賣捌所各府縣書肆

復製
 不許

(色の表) 水彩画手引與附

レモン色	16	15	14	13	12	11	10	9	1
ウアーミリアン	23	22	21	20	19	18	17	10	2
クリムソン	29	27	26	25	24	23	22	21	3
ライトレッド	34	33	32	31	30	29	19	12	4
セピア	38	37	36	35	31	28	20	13	5
ライトレッド	41	40	39	36	32	26	21	14	6
クリムソン	43	42	40	37	33	27	22	15	7
ウアーミリアン	44	43	41	38	34	29	23	16	8

よかくける筆

精 華

大 中 小
八 六 五
錢 錢 錢

大阪西區立賣堀中橋南入ル

淺井龍章堂

{ 賣 捌 所 }
{ 各 文 具 店 }

少年少女の讀むで面白き雑誌です

文聲

正價

貳錢五厘

第四號 一月一日發行

發行所

大阪市西區立賣堀
中橋南へ入ル

櫻俱樂部

賣捌所は各地有名なる書肆にあり

●	●	●	●
毛筆	水彩	水彩	毛筆
畫	畫	畫	畫
繪具	繪具	紙	版
賣	販	廉	精
字	字	價	品
寫	寫	廉	品
字	寫	價	品

少年少女の讀んで面白き雑誌です

文學

正價

貳錢五厘

第四一〇日發行

發行所

中野南區入道

櫻葉俱樂部

賣捌所は各地有名なる書肆にあり

●毛筆

●畫版

精品

●水彩畫筆

●畫洋紙

廉價

●水彩畫

●繪具

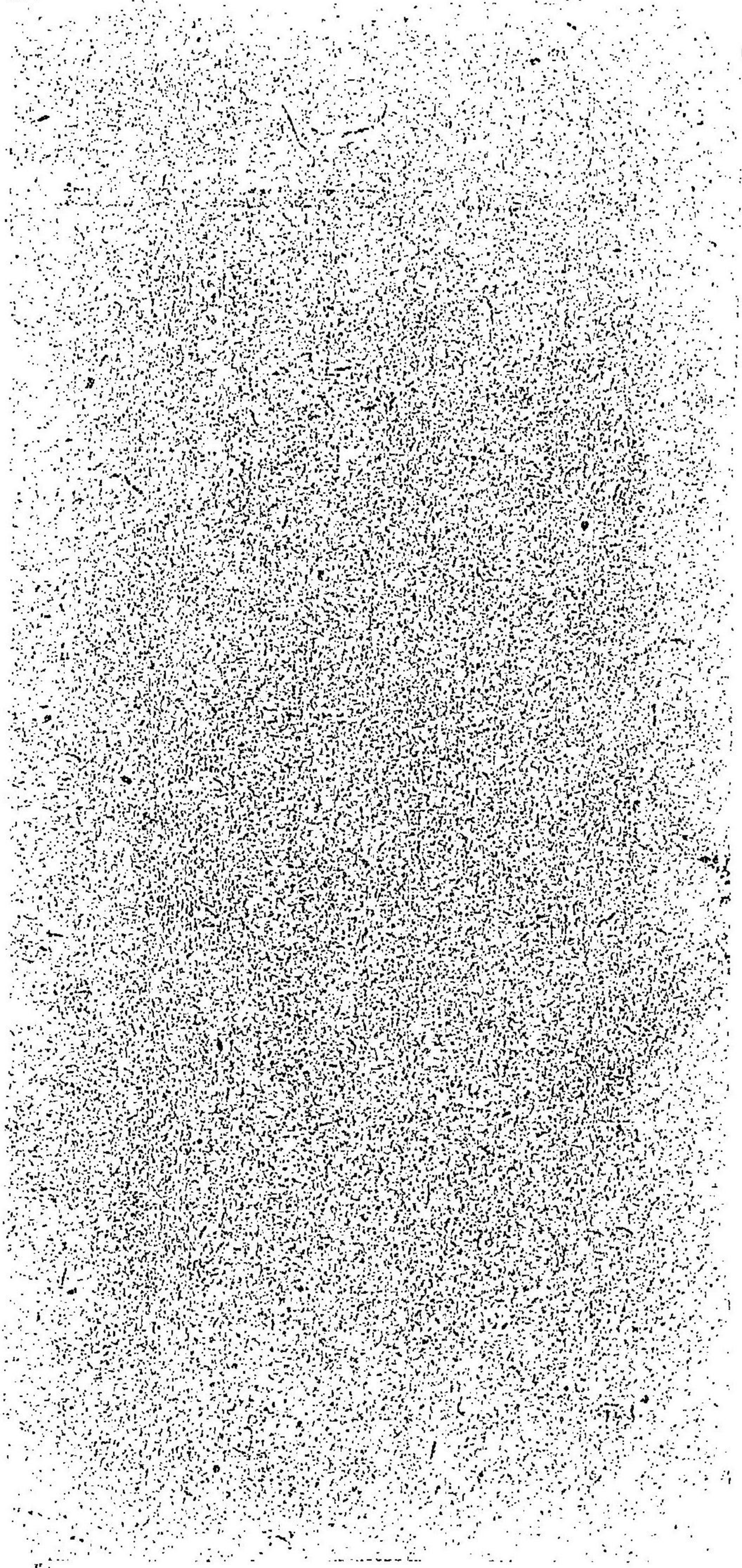
に販

●毛筆畫

●繪具

賣す

淺井龍章堂



特 71

959

301502-001-3

特71-959

水彩画手引

蟪 蛄 / 著

M36.1

CEC-0001

